

中村哲医師アーカイブ

*「神戸新聞」連載より（二〇〇三年一月二八日）

善悪の彼岸——平和の闘士

中村哲

空爆前から、アフガニスタンは空前の干ばつに見舞われた。廃村が広がる中、わがチームは飲料水源確保に乗り出した。現在、作業地は九百を超え、約三十五万人が離村

を免れた。

いろいろと工夫したが、結局「手掘り井戸」が成功を収めた。手作りが機械力を圧倒する世界なのだ。

深いもので八十メートル以上。現地の地層は子牛ほどもある巨礫が続き、突き当たるとツルハシでは歯が立たない。この処理が大変だった。大活躍したのが地雷やロケット砲の不発弾。地雷といえばすぐに爆破処理せねばと皆信じているが、必ずしもそうでない。作業員がどこからともなく拾ってきて、火薬をかき出す。巨岩に穴を穿^うつてこれを詰め込み、爆破する。大当たりとなったこの巨礫処理が、成功の秘訣だった。「爆破担当」は、爆破好きの農民を集めた。彼らは、ソ連軍侵攻中に敵の戦車を爆破していた元ゲリラたち。昔戦争でやったことが、今人助けになっているのだ。この話を聞いた報道関係者が痛く感激、盛んにインタビュした。

「爆破が平和に役立つのは、やりがいがあるでしょう」

「はい、楽しいですねえ」

「戦争でやるのと比べて、いかがですか」

「敵兵や戦車の爆破も、結構好きですねえ」

「でもやはり人助けの方が…」

「どちらも面白いですねえ」

誘導尋問で何とか美談を作ろうとしても無駄で、質問者はとうとう、苦笑して匙を上げてしまった。対象が何であれ、当人は爆破そのものが好きだったのだ。

考えてみれば、人道主義に燃えて何かを始めても、長続きせぬことが多い。結果的に立派なことでも、それは天が人を用いるからで、その逆はあり得ない。それは、善悪の彼岸である。